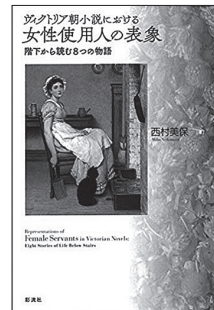


## 書 評

西村美保著『ヴィクトリア朝小説における  
女性使用人の表象  
——階下から読む8つの物語』  
(彩流社、2018)

坂口 美知子



……そのとき彼女は世界で自分が一番必要とされていることをよく知っていた。何喰わぬ顔でこの世の秩序を裏側から維持してゆく者の自信は、大切な儀式の最中に綻びる筈のない着物が綻びたり、忘れる筈のない祝辞の草稿が失くなっていたりする、物事のふしぎな起り具合を知悉しているところから生れていた。彼女にとってはむしろそんな起りそうもない事態が常態であり、その機敏な繕い手であることに、自分の不測の役割を賭けていた。

三島由紀夫『春の雪』

冒頭のやや長い引用は、没落しつつある伯爵家を支える女使用人頭「老女」の蓼科が、お家の一大事とは言えないがそれなりに重大な局面を、事の軽重をわきまえた「習熟したやり方で」何喰わぬ顔で救った場面の後に書かれているものである。「世の秩序を裏側から維持してゆく者」としての自分の存在理由を極めた、まさに「忠実な」使用人の鑑である。評者は、遙か昔の10代の頃より小説や映画に接するとき、ヒーロー・ヒロインよりも、彼らを立役者たらしめる「お次の者たち」の方に憧れの念を持って注目する傾向があった。『忠臣蔵』で一番感動したのは、冒頭に近い部分、初めて勅使饗応役を仰せつかった浅野内匠頭の家臣たちが、吉良上野介による数々の辱め工作に対して、周到な準備と機転である時点までは乗り切っていく部分であった。白洲正子の自伝でも、武家出身の乳母の教えが彼女のひととなりの大きな部分を形成している点が尊敬をもって語られ、榊原喜佐子が『徳川慶喜家の子ども部屋』で描く大会社の総務課のような確固たる組織・序列の中で、それぞれの場や分をわきまえ、気概をもって働く使

用人たちや、会津城落城の時の模様を語り伝える乳母の存在などが深い敬愛の念をもって記されていることに関心を持った。イギリス文学・文化に注目するようになってからもやはり、「近侍から見れば英雄もただの人（“No man is a hero to his valet.”）」という言葉を実証するような、P・G・ウッドハウスのジープス・シリーズに熱中し、就職難だった女子大卒業時には、アガサ・クリスティ『パディントン4時50分発』の有能な高給取り家政婦のルーシー・アイルズバロウに憧れた。カズオ・イシグロの『日の名残り』が1993年に映画化されたときは、執事スティーブンスやミス・ケントンのイメージが崩れませんように、と祈りながら鑑賞して、そう裏切られなかったことにほっとしたりしたものである。

これまで長々と自らの「お次の者たち」への偏愛傾向を綴ってきてしまったのは、本書に挙げられている8つの物語のうちの半分もきちんと読んでいないのに、書名に魅せられて軽率にも書評をお引き受けしまったことへの身が縮むような申し訳なさからである。しかし、浅学の身から申し上げるのは誠に僭越ではあるが、本書は、詳細な作品分析と綿密な研究調査に裏付けられた学術書であると同時に、著者の各小説のヒーロー、ヒロインおよび「使用人」達に向ける深い親愛の念と共感が通奏低音のように行間に満ちた珠玉の一冊であると思う。

本書は、「登場人物としての役割の重要性に程度の差があっても、使用人が登場し、何らかの形で作品の構造に影響を及ぼしている文学を総じて『使用人文学』と呼ぶなら、イギリス文学には古くから『使用人文学』の系譜が存在すると思われる」という著者の確信のもとに展開され、「支配階級的な視点」と「雇われている側からの視点」の「その両面を考察」してつまびらかにすることを目途としている。そして、それらを詳細、丹念に、時に直感的に行うことで、あとがきに「こうした多様な女性使用人の表象を通して、背景となるヴィクトリア朝社会の、複雑で、矛盾に満ちた価値観や女性観、そして作家たちの多様な意図と思惑を読み取ることができるだろう」とあるが、その著者から読者への約束は十二分に果たされていると思う。なぜなら、本書が教科書としても秀逸だと思われる点の一つは、作品分析の鋭さのみならず、それぞれの論を立証するための歴史的事実の提示や批評家および研究者の分析の提示が豊富で的確な点であろう。それ

らは、説得力をもって、当時の空気を理解できない読者に作品理解を深める心強い手助けとなってくれる。

以下に、本書の構成を示し、各章を(素人臭い感想の羅列になってしまつて誠に恐縮であるが)、概観したい。

- 第一章 乳母を通して見るヴィクトリア朝社会——『デイヴィッド・コパフィールド』の乳母ペゴティ
- 第二章 女性使用人の階級とモラル——『オリヴァ・ツイスト』の雑役女中シャーロットと家政婦ベドウィン夫人
- 第三章 ガヴァネスの孤立、階級間闘争、交流——『アグネス・グレイ』のアグネス
- 第四章 家事使用人とガヴァネスの多様な関係性——『ジェイン・エア』
- 第五章 階級を超えた女性たちの相互扶助と自立——『女主人とメイド』
- 第六章 カントリーサイドの女主人と女性使用人たち——『遙かに狂乱の群れを離れて』
- 第七章 女主人を脅かす存在としての侍女——『エセルバータの手』
- 第八章 農場使用人の表象と因習的な女性観への挑戦——『ダーバヴィル家のテス』

第一章では、上流階級に雇われる一般的な乳母とはややその特性を異にする登場人物ペゴティを取り上げて、まずその容姿の描かれ方を「労働と母性の象徴」として解析する。アーサー・マンビーやロバート・ルイス・スティーブンソンの例が出た時点で浮んだ、ヴィクトリア朝紳士階級子弟の「女性労働者への憧憬の念」がやや倒錯的または猟奇的な方向にいくのではないかとの予測は、直ちに心持よく否定されることとなる。それらは乳母が子弟に対して持ちえた影響力の実証として提示され、議論は理想の乳母像や階級問題へと、再びペゴティの服装等の表象を解析しつつ進んでいくのである。また章の最後の節で詳細に扱われる「使用人問題」は、その後も長く上中流階級の一家の主人(女主人)の悩みの種であり、理想の使用人と現状の乖離は時代によって再定義され続けるが常に背景としてあったという点をしっかり理解しておくことは、多くの作品理解を深める

うえでも重要であるだろう。

第二章では『オリヴァ・ツイスト』の雑役女中シャーロットと家政婦ベドウィン夫人を取り上げて、堕ちた女予備軍としての危うい存在としてのシャーロットの表象を通じて、その致しかたなさを立証しつつ、「調和」を具現化した存在としての「忠実な年配の女性使用人」のエッセンスを抽出している。

第三章、第四章はガヴァネス論を中心に展開する。ガヴァネスが、自らに身に付けた教育や出自の価値観、それを提供する際の家族の目論見もろとも売りに出す「売春婦」のメタファーで語られたというジョイス・センダーズ・ピーターソンの指摘や、キャサリン・ヒューズの「リスベクタブルな女性がガヴァネスにならざる得ない7つの事情」の紹介などは、ガヴァネスがいかに最初からルサンチマンの権化として家庭内に存在していたかを実感できて戦慄するほどであった。引き続き著者の雑誌記事や統計をひきながらの説得力ある解析が精度を増していく。特に、p. 84に「家庭でのガヴァネスの存在はガヴァネス自身の家族の失敗の証拠である」と明言してある点に目の覚める思いがした。実はここ数年、評者は上中流階級子女の社交界デビュー準備教育について細々と調べてきたのだが、パリやスイスのフィニッシング・スクールの熟練した女性教授陣はいざ知らず、主に家庭内でその役割を担うガヴァネスには、自身がその経験を経ていないので(つまり、社交界デビューに成功して有利な結婚をするというミッションを達成していないのに)その難しい任務、すなわち定石どおりではない場のダイナミックスを読んだ立ち回りを可能にするような技術取得教育を実施することは、一般的なガヴァネスには到底不可能であったろうと感じていたからである。この章でさらに立ち上ってくるのは、アグネスの苦労や苦悩・孤独に寄り添う著者の眼差しのあたたかさと寛容さである。作品の引用部分から感じられるアグネスのナイーブさと職業婦人としての積極性の欠如が、評者はややじれったく感じられたからである。昨今の世知辛い「即戦力」重視に毒され、「育成」「涵養」の意味を忘れがちになっている自分の枯渇を反省した。

第四章で『ジェイン・エア』がシャーロット・ブロンテ自身もそうであったガヴァネスとしてのアイデンティティを中心に語りなおされる時、その

リアリティはそれだけで圧巻であるが、著者はそれに頼りすぎることなく冷静周到に細部を立証しながら分析を進める。しかし時折、著者が主人公に期待する強い思いに当惑することもあった。例えば、p. 145のジェインの自尊心の強烈さについて解析する場面で、著者が「彼女の人に与える愛は自己犠牲的でも惜しみないものでもなく、自分の愛情をきちんと評価されたり、報われる場合にのみ与えようという非常に慎重な、ある意味賢いやり方なのである」という説明を与えている本文の引用部分についてなどである。私には未熟で恋愛に極めてナイーブな、もともと劣等感の強い女性が、今まで経験したことのないような強烈な情念に驚いて否定しようと身もだえしている場面のように思えるのであるが、単純すぎる読みかもしれない。また、各章に時折みられる著者が「階級」を扱う時の視点の揺れは、当時イギリス社会に厳然と、しかし時に侵襲的でもあった「階級」を解釈する上での危うさをうまく乗り切る著者の手立てではないのかとも感じた。

第五章では日本では今日までほとんど紹介されてこなかったダイナ・マロック・クレイクの本書の核心をなすとも言える作品『女主人とメイド』を、「ヴィクトリア朝社会の階級間の壁は厚い」という言説を掘り崩す点に焦点をあてて、当時の雑誌等の言説を証拠として詳細に分析している点でひとえに素晴らしい。第六章から第八章は支配者側でない「弱者」たる女性たちを一つのスペクトラムに配置してそれぞれの間の微妙な差異をつぶさに見ていった感がある。『遥かに狂乱の群れを離れて』の章では、主人公バスシバと、彼女の親友ともいえるような侍女リディアとの関係を精査して、現代人に最も受け入れられやすいという点で、ハーディの革新性が浮き彫りにされた。女性同士の情熱的な関係も示唆されているが、著者はそこに深入りしていない。次の『エセルバータの手』を扱った章では、一人の女性の向上心や野心が支配階級にとって脅威となりえる過程をつまびらかに分析している。『ダーバヴィル家のテス』の章では、1979年公開の映画のテスがあまりに美しかったため、牧歌的な「農婦」としてとらえる視点が評者には持ちにくかったのを思い出した。その意味で、テスを当時の「農場使用人」として捉え直し、その道徳的規範やモラル感の解析した著者の洞察のおかげで、より正しい作品理解へと導かれた思いである。

本書を読むことで、「非階級社会に育った読者」の一人として改めて使用人を理解し、その階級意識を理解することがどんなに作品理解を深めるか、ということをも身をもって経験させていただいた。著者はあとがき最後に、今後20世紀イギリス文学における使用人の表象へと研究対象を広げる展望を示されている。アリソン・ライトが『ミセス・ウルフと召使たち (*Mrs. Woolf and the Servants*)』で明らかにしたヴァージニア・ウルフと使用人たちの愛憎物語のように、より複雑となるであろう階級意識の綾を紐解く著者の手腕の成果を大いに期待したい。

——獨協医科大学講師